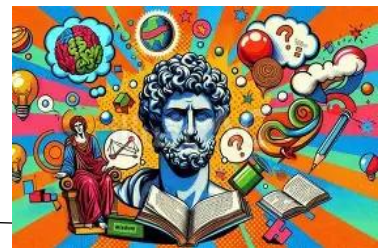


## ルール?! マナー?! Vol. I

先日、全校で朝の会をしました。覚えているでしょうか??ルールとマナーについてです。今一度文字にして「ルール」や「マナー」について考えていきましょう。

まず、「ルール」というものはなぜ必要なのでしょう?そして、なぜルールを「作り」「守る」必要があるのでしょうか?学校には様々な決まりがあります。社会では、それ以上です。多分、君たちのほとんどが、大人になれば車を運転することになるでしょう。でもそのためには、免許が必要であり、交通ルールを守らなければなりません。職業に就けば、その職業に必要な資格(免許)が求められます。資格(免許)を取得するためには、関わる技術を身につけると共に、法律(ルール)を学び守る必要性があります。会社に勤めれば、社規(会社のルール)を守らなければならず、自分で起業する場合でも同様です。そして、それらが守られない場合は免許が剥奪されたり、どんな有名人であっても社会的な制裁を受けたり処罰を受けたりします。

今日は、このルールということについて、苅谷剛彦氏と西研氏が書かれた「考えあう技術 - 教育と社会を哲学する」より、いくつかの文章を紹介します。少々難しいかもしれませんが、今是非、ルールということをもう一度考えてみてください。



### 個人と自己 加害者と傍観者 —「共に」生きるということ—

「個人」と「自己」という言葉、似ているようで少しちがいます。「個人」は社会の中で生きる一人の人としての自分。「自己」は自分の内側の思いや考え、気持ちそのもの。

この二つを区別せずに「自分のことだけ考えていればいい」と思ってしまうと、気づかないうちに他の人を困らせてしまうことがあります。社会は一人ひとりの意見や考えが集まってできているからこそ、「自分だけが正しい」と思いこむと、話し合いや助け合いが成り立たなくなるのです。

たとえば、何かの場面で誰かが傷ついていても、「自分には関係ない」と見て見ぬふりをしてしまうことがあります。そうすると、困っている人はもっとつらくなってしまいます。自分は直接の加害者ではなくても、傍観者であることで、結果的に誰かを追い詰めてしまうこともあるのです。

だからこそ、「共に学ぶ」「共に生きる」ということが大切です。学校は、ただ知識を学ぶ場所ではありません。自分とちがう考えや立場の人と出会い、話し合い、時には意見がぶつかる中で、「他の人の感じる不都合」や「つらさ」に気づくことができます。

そうした気づきを通して、おたがいに支え合える力を育てていくこと——それこそが、学校で学ぶ大きな意味のひとつではないでしょうか。

### メンバーシップの感覚 —仲間として「共にいる」ということ—

学校という場所が本当にいい空間になるのは、そこにいる一人ひとりが「自分もこの集団のメンバーなんだ」と感じられるときです。たとえば、部活動や委員会、クラスの中でも、同じ目標に向かって協力するときに、自然と仲間意識が生まれますよね。そのとき感じているのが「メンバーシップの感覚」です。この感覚があると、「自分さえ困っていなければいい」とは思わなくなります。たとえ自分には直接関係のないことでも、「あの人が困っているのは、私たちのチームの問題かもしれない」と考えられるようになるのです。そうして、おたがいのことを気づかいながら行動できる集団は、自然と風通しがよく、気持ちのいい場所になっていきます。

メンバーシップとは、「誰かがつくるもの」ではなく、「みんなでつくるもの」です。おたがいの違いを認めながら、声をかけ合い、話し合い、支え合う——そんな関係を少しずつ広げていくことが、「共に生きる学校」を形づくっていくことにつながります。

## フェアな共存 —公正に、自由に生きるために—

「自分は嫌だ」「頭にきた」と感じることは、誰にでもあります。でも、その気持ちだけでは、他の人を説得することはできません。「みんながフェアに共存するためにはどうすればいいか」という視点で考え、話し合うことが大切です。たとえば、「自分がイヤだと思うこと」と「人が気持ちよく共に生きるために守るべきルール」は、同じではありません。この2つを混同してしまうと、本当の意味での“公正さ”がわからなくなってしまいます。「差別された」と感じたときも同じです。

その人が傷ついた気持ちはとても大切にされるべきですが、それだけで「差別」と言い切れるわけではありません。本当にそれが社会の中で“アンフェア”なことかどうか——つまり、人々が公正に自由に共存する上で問題があることかどうか——を、みんなで考えていく必要があります。

最近、「傷つく」「傷つきやすい」という言葉をよく耳にします。でも、「私がつらい」「私が嫌だ」という気持ちと、「人々が公正に共に生きる上での問題」とは、別の次元のことです。

この2つをきちんと区別して考えることができれば、感情だけに流されず、おたがいが尊重しあえる社会をつくる力が育っていきます。

“フェアに共存する”とは、自分の気持ちと社会のルールを分けて考えること。その力を身につけることが、自由で公正な社会を支える第一歩なのです。



## 分割線が引けること —感情の自分と、社会の中の自分—

生きていると、「自分」と「まわりの人」や「集団」との関係の中で、どう考えたらいいのか迷うことがあります。そのときに大切なのは、自分の中で“分割線”を引けるようになることです。たとえば、「自分が苦しい」「嫌だ」と感じるがあっても、それがすぐに「ルールが悪い」「相手が悪い」ということにはなりません。ルールというのは、みんなが気持ちよく共に過ごすためにあるものです。つまり、「自分の感情」と「集団の中でフェアに生きるための考え方」は、別の次元のことなのです。この2つを区別して考えられるようになると、感情に流されず、落ち着いて話し合うことができます。「感情・感覚としての自分」と「メンバーの一員としての自分」。

このあいだに分割線を引けることが、社会の中で公正に生きるための第一歩です。もちろん、感情を押さえつけるという意味ではありません。大切なのは、「自分がどう感じているか」を自覚したうえで、「みんなが気持ちよく共に過ごすにはどうすればいいか」を考えること。その2つを行き来しながら、自分の考えを深めていくことが、成長ということなのだと思います。

## 集団のメンバーとしての経験 —フェアにふるまうことの心地よさ—

みんなで何かをするとき、「集団の一員としての経験」があると、人は成長します。仲間と協力してうまくいったり、笑い合ったりした経験が積み重なると、「ルールを守ること」や「フェアにふるまうこと」が、ただの“我慢”や“面倒なこと”ではなくなります。むしろ、誰かがフェアでない行動をしたときに、「それは違う」「なんか気持ち悪い」と感じるようになります。

つまり、「集団の中の一員である自分」が心の中に根づいてくると、自然に“道徳的な感情”が育つのです。「これは正しい」「これはアンフェアだ」という感覚——それが、ルールを大切に思う気持ちの土台になります。

最初は、「みんなでゲームをしたら楽しかった」「一緒に文化祭を作り上げて達成感を味わった」——そんな小さなところから始まります。でも、時にはうまくいかないこともありますよね。そのときに、「こうしたらもっと良くなる」と自分たちで話し合い、ルールを見直せた経験。それこそが、メンバーシップの感覚を育てる大切な経験です。

そうした経験がないと、集団は「ただ合わせる場所」「我慢するしかない場所」になってしまいます。でも、本当の集団はそうではありません。みんなで作り、みんなでより良くしていける場所——そこにこそ、「共に生きる」学校の意味があるのです。

あなたにとって「ルール」という考えは?? どの部分に共感できましたか?